

宇都宮市初期日本語指導教室の取り組み



宇都宮市初期日本語指導教室

宇都宮市教育センター教室

田中弓園

1. はじめに

宇都宮市では、文部科学省より「平成 20、21 年度帰国・外国人児童生徒受入促進事業」の地域指定を受け、外国人児童生徒教育体制の整備・充実に取り組んでいる。宇都宮市初期日本語指導教室は、その事業の一環として、日本語指導と学校生活適応指導が必要な児童生徒に集中した指導を行い、初期日本語を習得させるとともに、小・中学校生活への円滑な適応を図るために、市内 2 か所に開設された。

教室は、様々な国籍や言語の外国人児童生徒が居住する J R 宇都宮駅周辺地域に近い宇都宮市教育センター内と、南米を中心とした国籍の児童生徒が多い清原地区に開設されている。

2. 教室の概要

平成 20 年度は、平成 21 年度に小学校へ入学予定の幼児、小・中学校へ編入学予定の子ども、及び平成 20 年度に小・中学校へ入学・編入学した児童生徒を対象に、平成 21 年 2 月 23 日（月）から 3 月 19 日（木）までの期間、午後の時間帯に開設された。宇都宮市教育センター教室（以下、教育センター教室）では月曜日から金曜日までの計 19 日間、清原地区市民センター学習室を借りての清原教室では、月曜日と水曜日の計 8 日間、指導を行った。指導スケジュール調整や補充学習指導を行う 2 名の担当員と中国語、タイ語、フィリピン語、ポルトガル語、スペイン語で指導のできる 7 名の指導員が指導に当たった。開設期間中に教育センター教室には計 14 名、清原教室には計 7 名の児童生徒が通級した。

平成 21 年度は、指導内容や時間帯、通級対象者を、それぞれの地域の実情に合わせる形で、6 月に指導を開始した。清原教室は宇都宮市立清原中

学校内の教室に場所を移して設置された。

3. 教育センター教室での指導

私の勤務している教育センター教室では、来日しておよそ 3 か月以内の子どもたちに、月曜日から金曜日までの午前中、約 2 か月を目安に、担当教員 1 名と非常勤の指導員 5 名（中国語、タイ語、英語担当）で指導を行っている。平成 21 年 6 月から平成 22 年 1 月までの期間に、中国・台湾国籍児童生徒 9 名、タイ国籍児童 4 名の計 13 名が通級し、そのうち 10 名が初期日本語指導教室での集中学習を修了して、市内の小・中学校へ編入学している。

教室では、来日間もない子どもたちが、少しでも早く学校生活に適応することができるよう、基本的な日本語の指導（ひらがな、カタカナ、小学校低学年の漢字の読み書き、挨拶、簡単な会話や文章、学校生活や日常生活に必要な語彙等）に加え、学校生活に関すること（学校での授業の様子や持ち物、給食や清掃の様子や方法、主な学校行事や中学校での制服のきまり等）、また日本の日常生活に関すること（生活習慣や年中行事、交通ルール等）を説明したり、実際に体験する機会を作ったりしている。

教育センター教室の日課は日本の小・中学校の日課に準じたものになっている。一日はまず朝の会で始まり、毎朝、呼名や健康観察を行っている。礼や返事の仕方、「起立」、「気をつけ」、「礼」、「着席」の号令のかけ方を全員で練習し、子どもたちは交替で日直当番として、一人で号令をかけることも体験する。授業は、10 分または 15 分の休み時間をはさんで、45 分間の授業を 3 時間実施している。通級開始時の日本語習得状況や年齢、母語、指導内容等により、個別指導とグループ指導や一斉指導を組み合わせで行っている。授業のあとには、全員で簡単な清掃を行い、さらに帰りの会を行っ

て下校となる。帰りの会では、その日に学習したことや宿題を一人ずつ発表し確認する。

4. 通級する子どもたち

昨年の夏休み明けの9月、出身国は違うが、日本語が全く話せない同じ学年の女子児童2名が通級することになった。それぞれ母親と一緒に面接に来たが、とても不安そうで表情も暗く、通級開始当初は母語のわかる指導員との会話が多くなりがちだった。しかし、次第にお互いに誘い合って水を飲みに行ったり、シールやかわいいイラストのメモ用紙を持ってきて交換したりする姿が見られるようになった。さらに日が経つにつれ、ひらがな、カタカナのかたや、会話や歌の練習に元気に取り組むようになり、教室に笑顔や笑い声が少しずつ増えていった。彼女たちの表情は通級開始時と比べると見違えるように明るくなり、その変化に、担当教員や指導員もほっと安堵し明るい気持ちになることができた。

また、母語の文字とは、形も書き方も全く異なるひらがなやカタカナを、一文字ずつ丁寧に練習したり、覚えた日本語の単語を組み合わせ、何とか思っていることを伝えようと一生懸命な子どもたちの姿を見ていると、その努力には本当に頭が下がる。今大変な思いで身に付けた日本語が役に立つ時が来る、何とかがんばり抜いて欲しいと小さな後ろ姿にエールを送らずにはいられない。

教育センター教室に通級する、日本に来日したばかりの子どもたちにとって、日本での生活はすべてが初めての体験であり、これから小・中学校で直面するのは言葉の問題だけでない。また子どもたちの来日した理由は様々であり、家庭の事情で本人の意志に関わず急に日本に来ることになった子どもや、お互いの言葉がわからず、日本人の父親と家庭で十分にコミュニケーションを図ることが難しいという状況の子どももいる。彼らには、学校生活の他にも自分自身で克服したり、折り合いをつけたりして乗り越えていかなければならないハードルがいくつも待ち受けている。そのような子どもたちにとって、初期日本語指導教室が、楽しく通級して学習できる場所であるとともに、温かい雰囲気の中で安心して心を開くことができる場所になって欲しい

と願いながら、日々の指導に当たっている。短い期間ではあるが、子どもたちの不安を少しでも取り除き、日本や宇都宮のことを好きになるきっかけを作って、彼らを日本の学校へ送り出していきたい。

5. おわりに

宇都宮市初期日本語指導教室の担当教員と指導員は昨年、平成20年度に小山市に開設された外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」や県外の先進地域2か所の適応指導教室を視察させていただく貴重な機会を得た。地域の実情により指導体制やカリキュラムは異なるが、どの地域、教室の取り組みも大変参考になる点が多かった。外国人児童生徒の学校生活への円滑な適応を図ることに加え、外国人児童生徒を受け入れる学校側の負担の軽減につなげる意味でも、このような教室が重要な役割を果たしていかなければならないことを改めて痛感した。

また宇都宮市では、編入学後子どもたちは、各小中学校において、学級担任や日本語教室担当の先生方の他、教育委員会から派遣される母語による日本語指導講師、日本人の日本語ボランティア等、様々な立場の複数の指導者から日本語や生活面の指導や支援を受けることになる。一人ひとりの子どもたちの状況に応じた、適切で効果的な指導を継続して行うために、今後宇都宮市初期日本語指導教室は、多くの指導者の方々とより一層連携を図っていくことが必要である。

宇都宮市では平成21年7月に「宇都宮市外国人児童生徒教育推進計画」を策定し、文部科学省の地域指定終了後も、初期日本語指導教室での指導を継続していく予定である。宇都宮市民となった外国人の子どもたちが、日本での学校生活に一日も早く慣れ、本来の子どもらしい笑顔で生き生きと学校生活を送ることができるように、また日本での生活や将来に夢や目標を持って踏み出していくことができるように、教育センター教室と清原教室の担当教員や指導員が力を合わせ、準備、開設から約1年となる実践の中で見えてきた課題をふまえてさらに研修等を重ね、初期日本語指導教室での指導を充実させていかなければならないと考えている。

(平成22年2月寄稿)